

第4分科会 中学校

道徳科における教材の選択と活用

～現代的な課題と向き合う教材の活用～

札幌市立中央中学校 教諭 平井 旭人

1 はじめに



本校は昭和 43 年 9 月 1 日に一条中学校と陵雲中学校との統合中学校として開校した。前身の両校は札幌の中心部にあって有数の教育実践校であり、その両校の先達が築き上げてきた、校風と教育実践を受け継ぎ、名実共に百万都市札幌にふさわしい気品と品格と風格のある、中央に位置する学校でありたいと「中央中学校」の名が付けられた。平成 29 年度には新校舎が完成している。

学年間の繋がりを大切にした教育活動の実践も重点に置いており、毎年、修学旅行から列車で帰校する 3 年生の生徒を、校舎の屋上から 1・2 年生が黄色いハンカチを振って迎える「黄色いハンカチ」は、1990 年代から現在まで行われている。



校訓 「吾あり 人あり 学びあり」

《吾あり》 自分自身を大切にし、質の高い理想を目指し、強い意志をもって未来を創造していく生徒の姿。

《人あり》 友人、地域の人々とのつながりを大切にし、日本や世界の国々の全ての人々と共に生き、思いやりの心を大切にする生徒の姿。

《学びあり》 真理と正義を追求し、社会の中で役立つ人になるため、確かな知恵を自らの学びとしていく生徒の姿。



2 本校の研究に関わって

中学校では令和元年度から道徳の教科化が全面实施となった。本校では、平成 28 年度～平成 31 年度までの 4 年計画の校内研究の中で、「より良く生きていくための資質・能力を培う道徳教育の充実」を視点の 1 つとして焦点を当て、教科化に向けての研修に努めてきた。平成 30 年度の開校 50 周年記念式典の際には全学年で道徳の公開授業を実施している。

各学年で年間を通じた「ローテーション道徳」での授業実践を行っており、教員全体で道徳の授業づくりのアップデートとフィードバックを行っている。現在は、令和 2 年度～令和 5 年度までの 4 年計画として「生徒同士の関わり」や「対話」から学びを深める姿を目指し、授業実践に努めている。

研究主題（4年計画 3年次）

「関わりをもって自ら学びを深める生徒の育成を目指して」

研究副主題

「対話を通して、課題探究を進める授業の創造」

3 道徳の授業における「出会い」

教科化となってからまだ日の浅い道徳科においては「道徳の授業は難しい」、「どうすればよい授業が出来るのか」という声は少なくない。特に道徳の授業では「道徳的諸価値」や「よりよい生き方」という抽象的なテーマを扱うため、教材選定や教材解釈が授業の成否を左右するとも考えられる。教員が願いを込め丁寧に準備をすれば、生徒にも伝わるし、逆もまた然りである。しかし、日々多忙な学校現場、道徳科の教材研究や教具づくりだけに多くの時間を割けないことも事実である。森川氏は限られた時間を有効に活用し、生徒が意欲的に取り組むことができる授業づくりにおいて大切にすべき「3つの出会い」について次のように整理している。

授業で大切にしたい3つの出会い 比治山大学准教授 森川敦子

東書Eネット「道徳授業、こうすればできる!」より

- 1 教材との出会い
- 2 友達の考えとの出会い
- 3 自分自身の考えとの出会い

(1) 教材との出会い

教材と生徒がどう出会うか。これは授業の成否を左右する大きな要素である。登場人物や場面のイラストや写真を活用し、教材の内容を全ての生徒が理解できるような提示方法の工夫や、導入や終末で学級や学校の実態を取り上げ、生徒が自我関与しやすい状況をつくるなどの工夫をしたりしながら、生徒と教材の出会いを演出していく。

(2) 仲間の考えとの出会い

生徒が授業に意欲的になる重要なポイントであると考えられる。授業では、多様な考えや対立する考えが出るような中心発問を設定するとともに、ペアやグループ、全体交流など仲間の考えを聞き合える活動を設定していく。生徒たちは授業を通して仲間の考えと出会う大切さや喜びを知ることで、仲間の考えとの出会いは学習の深まりや意欲の向上に大きくつながっていくと考える。

(3) 自分自身の考えとの出会い

道徳授業は「自己の生き方についての考えを深める」ためのものである。つまり、自分自身や自分の考えと出会うことが「道徳」の授業たるために大切なことと考えられる。教師も人間である以上、上から目線で一方的に「正解なるもの」を伝えようとするのではなく、「わかっているけれどなかなかできない自分」、「それでもよりよく生きたいと願う自分」を認め合い、生徒と共に考え続けるスタンスが求められると感じる。

東書Eネット「道徳授業、こうすればできる!」より

4 現代的な課題と向き合う教材の活用

(1) 情報モラルの育成の視点から

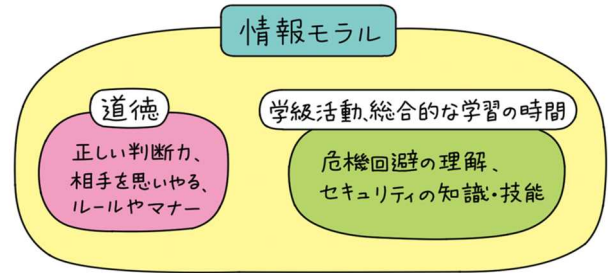
中学生のネット利用状況(95%)

69% … スマートフォン 32% … タブレット端末
32% … 携帯ゲーム機

ネット利用の内容

80.5% … 動画視聴 80.3% … SNS
66.2% … 音楽視聴 58.6% … 情報検索 内閣府調査(2020)より

「特別の教科 道徳」の新設に伴って改正された学習指導要領では、情報モラルに関する扱いが「留意すること」から『充実すること』に変更されている。その背景には、情報社会の急速な進展に伴い、生徒たちを取り巻く情報社会の影の部分の部分がさらに大きな問題となってきたことが要因として考えられる。三宅氏は情報モラルの内容の次のように整理している。



光村図書 HP 「道徳科でつきたい「情報モラル」の力」より
千葉大学特命教授 三宅健次

上記の図から SNS 上のコミュニケーションにおける正しい判断の在り方について考える授業実践を紹介したい。

実践例

1年生 「言葉の向こうに」 光村図書 中学道徳 1

内容項目 B(9) 相互理解、寛容

(あらすじ)

「私」が、好きなサッカー選手を巡るインターネット上のファンサイトへの書き込みで、トラブルに巻き込まれてしまったことを描いている。誹謗中傷に対して同様の言葉で対応してしまった「私」の行動に対して異なる見方や考え方をもち他者と関わるときに大切なことは何かを考えていく。

SNS などを利用したコミュニケーションは、基本的に相手が見えず、文字だけでやり取りする非対面性や、誰が書き込んだのかわからないという匿名性があるため、内容が過激になってしまう傾向がある。

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、さまざまなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって、謙虚に他に学ぶことについて考える内容項目である。

1年生 道徳ワークシート

7月19日(月)

言葉の向こうに

組 番 名前()

①【どうしてそんなコメントをしたの? それぞれの立場で考えてみましょう】

《加害者》	《A選手を罵く言う人》	《客観的な見方をした人》

②【「言葉の向こう」ってどういうこと?】

「いちいち反応して、ひどい言葉を向ける人、ファンとして恥ずかしいです。」

【言葉の向こう】って
どういうこと?



(2) インクルーシブ教育の視点から

誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会、つまり、「共生社会」の実現のために「インクルーシブ教育システム」の理念が重要であるとされている。学習面(「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」、行動面(「不注意」「多動性-衝動性」「対人関係やこだわり等」といった学校生活を送る上で、何らかの困り感を抱えている生徒は確実に存在している。道徳の授業においても全ての生徒たちに対し、個の人格を尊重し、個の学びを支援し、個別な学びのニーズに対応していくことが求められている。野本氏(2019)によると、道徳授業におけるハードルは以下のように分類される。

- ①道徳学習へのやる気(モチベーションのハードル)
- ②文章の読み取り、内容理解(国語力のハードル)
- ③登場人物の立場(役割取得のハードル)
- ④登場人物の気持ち(共感性のハードル)
- ⑤自分の事として振り返る(想起のハードル)
- ⑥発表し合い対話的に深く学ぶ(表現力のハードル)

日本道徳教育学会『新道徳教育全集第4巻』学文社より引用

上記の分類から①モチベーションのハードルと、④共感性のハードル、⑤想起のハードルに焦点を当てた授業実践を紹介したい。

実践例

1年生 「仏の銀蔵」 光村図書 中学道徳1
内容項目 C(10) 遵法精神、公德心
(あらすじ)

高利貸しの銀蔵は、ある日、証文つづりをカラスに持っていかれ、村人に貸していた金を回収できなくなる。初めは「罰が当たった」と言っていた村人たちは、銀蔵が生活に窮するようになると、証文もないのに「お天道様が見てござる」と借金を返しに来る。その理由を考えた銀蔵は、「そうか、お天道様か」と得心し、以降、高利での貸し付けをやめる。

法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして規律ある安定した社会の実現に努めることについて考える内容項目である。

コロナ禍における授業実践において、感染症対策を講じる上で、従来行っていた小グループでの話し合いの形式はなかなか実施しづらくなっている部分も否めない。本授業においては、生徒に赤、青、黄の三色のカードを配り、自分の思いに重なるカードを随所で活用しながら授業を進めた。TVのクイズ

番組などで時折見られる、フリップで一斉に回答を提示する場面を参考にした実践である。カードを挙げた時に教室を見渡し、仲間が挙げているカードから自分と同じ、または異なる考えを色の区別で「視える化」することで、仲間との対話も間接的に図った。



この時、銀蔵からお金を借りていた村人のあなたは…



(3) SDGs 教育の視点から

持続可能な開発目標(SDGs)は、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている2030年を期限とする開発目標である。「誰一人取り残さない(no one left behind)」社会の実現を目指し、先進国も含めて国際社会全体で取り組むこととされており、政府組織のみならず社会のあらゆる主体が積極的な役割を果たすことが期待されている。文部科学省は、平成29年3月に公示された小中学校新学習指導要領の中で、「持続可能社会の創り手の育成」を教育目標に掲げており、持続可能な社会づくりのために、学校現場においてもSDGsの取組が必要不可欠であり、地球規模の問題を主体的に考え、解決するために行動する力を育てることが重要視されている。

中学校では令和3年度から学習指導要領にSDGs

が盛り込まれており、SDGsを学ぶことは、世界で起きていることや、これまで抱えてきて解決できていない課題について考える機会となる。

木村氏(2021)は、SDGsの教育活動を進める上で、特に意識したいこととして、次の3点を挙げている。

- ① 「学習者の行動変容」をもたらすこと
- ② SDGsのゴールは一つ一つが相互につながっているということ
- ③ 自分事にするための工夫をすること

学研 学校教育ネット「SDGsと教育」より
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GIFT) 木村大輔



本校では、北海道ユニセフ協会の方を講師にお招きして、全学年での「ユニセフ道徳」を毎年行っている。授業の中では、世界の貧困地域の現状や問題点、私たちができることについてお話をいただき、現地で実際に使用されている物品も一定期間借用させていただき、実際に見て、手に触れてもらえるように展示スペースを設けている。授業後には、生徒会活動として募金活動も併せて実施している。

実践例

全学年 「ユニセフ道徳」北海道ユニセフ協会
内容項目 C(18) 国際理解、国際貢献



学校におけるSDGsへの取組は、「SDGsを学ぶこと」や「何か目立つことをすること」を目的にするのではなく、生徒の「どうして～なのだろう」、「～したい」という主体性がある、初めて成り立つと言える。世界の貧困や気候変動の事実を知っても、行動に移さなければ何も変わらない。日々の教室の中で何か問題を見つけてもアクションしなければ意味を成さない。他人事ではなく、自分事として行動に結びつくよう、一人一人が感じたことを共有したり、出てきた疑問や問いについて一緒に調べたりすることが大切である。「よりよい未来」のために「自ら行動できる力」を生徒一人一人に育てていきたい。



5 おわりに

学習指導要領解説には、「今後グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる」と記されている。こうした課題に対応していくために、社会を構成する主体である私たち一人一人が、人としての生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、より良い方向を目指す資質・能力を備えることが重要であり、その育成に向けて道徳教育は大きな役割を担っていると考えられる。

現代的な課題には、葛藤や対立のある事象も多いが、教材を通して価値に導くのではなく、「向き合う」ことを大切にしていきたい。受け身で対処するのではなく、生徒が主体的に向き合って関わり合う対話の中で、多様な他者との協働した活動の経験を経て、物事の本質に迫り、新たな価値理解との出会いや価値の深まりや広がり、再構築を図ることができるのではないだろうか。

今後も生徒が互いの価値観を磨き合いながら、どう生きるべきか(生き方としての課題)について、多面的・多角的な視点から自己を見つめることができるよう、今後も研修に努めていきたい。